

オーストラリアン・フットボール・リーグと人種差別

—AFL Rule 35 をめぐって—

尾崎 正峰 一橋大学大学院社会学研究科教授

はじめに

1978年、ユネスコ総会で採択され、スポーツ権の議論において常に言及されてきた「体育・スポーツ国際憲章」が改訂され、2015年のユネスコ総会で「体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章」として採択された。1978年憲章の理念を引き継ぐと同時に、その後の国際情勢や社会の変化などを含み込んだ2015年憲章は、その第1条で「体育・身体活動・スポーツの実践は、すべての人の基本的権利である」と謳い上げている。続けて、世界人権宣言にいう、いかなる差別を受けることなくすべての権利と自由を享有するとの理念に照らし合わせ、「1.1 すべての人は、人種、ジェンダー、性的指向、言語、宗教、政治的又はその他の意見、国民もしくは社会的出身、財産、その他一切の理由に基づく差別を受けることなく体育・身体活動・スポーツを行う基本的な権利を持っている」としている¹⁾。

そして、現在、2020年大会をめぐる話題に事欠かないオリンピックであるが、その基本理念を示すオリンピック憲章に目をやれば、「オリンピズムの根本原則」において「このオリンピック憲章の定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会のルーツ、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない」としている。さらに、「第1章オリンピック・ムーブメント」の「2 IOCの使命と役割」において「オリンピック・ムーブメントに影響を及ぼす、いかなる形態の差別にも反対し、行動する」とも述べられている²⁾。

スポーツに関する国際的憲章、あるいは国際的に影響力を持ちうる組織の理念を示す文書において、スポーツにおける差別の禁止と排除、換言すれば、さまざまな差異を乗り越えたスポーツと平等について言及されていることは、その理念の価値、そして、現実の社会における理念の具体化の重要性が示されているということができよう。ヨーロッパの地域において、グローバリゼーションの進展に伴う人の移動、移民の増大によってこれまで以上に多様なバックグラウンドをもつ人々の混在が進んでいると同時に、経済格差の拡大と新たな貧困の出現という事態が引き起こされている状況に対して、文化的差異を乗り越え、相互理解と包摂をめざして、スポーツのもつ文化的特性を生かしたさまざまな取り組みが行われていることは、理念の具体化への試みの現れといえる³⁾。

しかし、一方で、困難な状況もまた存在している。ヨーロッパの各国、地域において移民（の増加）に対する不満、反発が強まっており、イギリスのEU離脱の大きな要因になったともいわれる。差別と排除という、多様性の承認、あるいは寛容などに示される面とは対極の状況が世界各地で吹き出している⁴⁾。

筆者が研究のフィールドとしてきたオーストラリアは、1970年代以降、多文化主義政策に舵を切り、数多くの社会的経験を蓄積してきたといえる。そのオーストラリアにおいても多文化主義をめぐる様相は複雑化している⁵⁾。オーストラリアにおけるスポーツも、そうした政治的、社会的状況に影響を受けてきたと同時に、その存在の大きさによって社会に対して一定のインパクトを持つという両面性を有するなど、さまざまな紆余曲折を経験しながら、現在に至っている。

以上のような全体状況認識を基に、本稿では、2013年に起こったオーストラリアン・フットボール・リーグ（AFL）におけるアボリジナルの選手に対する観客からの人種差別的暴言に端を発する「事件」の経緯を紹介することを主眼とし、そこに折り込まれている意味をとらえる研究の視点を探ることを試みたい。

AFL Rule 35 制定の背景

本稿のテーマであるオーストラリアン・フットボール・リーグ⁶⁾における人種差別に関わる事例として大きく取り上げられる、1993年のAFLの試合でアボリジナルの選手に対して浴びせかけられた観衆からの差別的な野次とそれに対する選手の印象的な抗議の意思表示、そして、その後も類似の事態が発生したことを受けたAFLによる差別禁止条項の制定の経緯について筆者はすでにふれたことがあるが⁷⁾、行論の関係からここであらためてその概要をおさえておく。

全 51 条からなる現在のAFLのルール規定の中で、本稿のテーマに深く関わるものが、選手個人の民族、宗教、肌の色、国や民族的出自による中傷、侮辱、脅しを禁じることを定めたRule 35「差別、及び人種的、宗教的中傷(Discrimination and Racial and Religious Vilification)」である。条項全体は 17 項目にわたり、差別や中傷を受けた場合の異議申し立ての手続き、調停の方法等まで細かく規定されている。違反した選手の所属クラブに対して 最高 50units (=50,000 豪ドル) の違反金を払うことなども盛り込まれている⁸⁾。

こうした規定が制定されるに至った発端は、AFLの 1993 年のシーズンのラウンド 4、ヴィクトリア・パークにおけるセント・キルダとコリンウッドの試合での出来事であった。セント・キルダに所属するアボリジナルのニッキー・ウィンマー(Nicky Winmar)選手がコリンウッドのファンからの彼の肌の色をからかう差別的な野次に対して、自らのジャンパーをめくり上げ、指さし、"I'm

black – and I'm proud to be black!"と抗議の意思を明確に示した。その 2 年後、1995 年のアンザック・デイ(ANZAC Day)⁹⁾のメルボルン・クリケット・グラウンドにおける試合において、エセデンのマイケル・ロング(Michael Long)選手が自分の耳を疑うほどの暴言を受けたと抗議した¹⁰⁾。これらの事態を受けて、AFLは組織としての対策を講じることとなり、1995 年、オーストラリアン・フットボールにおける人種差別的行為の禁止条項であるRule 30¹¹⁾が制定された。こうした内容をもつ条項の制定は、AFLはもちろんのこと、プロのスポーツ組織として初のものであった¹²⁾。

2013 年の「事件」の経緯

上述の条項の制定以降も、AFLは差別をなくするためのさまざまな取り組みを継続的に行っている。その成果ととらえられるものとして、たとえば、2013年から2014年のシーズンにおけるアボリジナルの選手の登録は 68 人であるが、これはAFLの選手全体の 9%にあたるもので、オーストラリアの全人口に占めるアボリジナルの人口割合が 2.3%であることを考えると相対的に高い数値といえる¹³⁾。また、アボリジナルだけでなく、ムスリム、アフリカ、太平洋諸島、アジアなどより多様なバックグラウンドをもつ選手がAFLに登場するようになっている¹⁴⁾。

そうした中、アボリジナルの選手に対する差別をめぐる「事件」が再び起こることになった（ここで「事件」と表現するのは、この出来事がAFLの枠を大きく超え、世間を広く巻き込んだ議論を巻き起こすまでに拡大したこと、その影響の大きさを勘案してのことである）。2013年5月24日、メルボルン・クリケット・グラウンドにおいて、メルボルンをホームとするコリンウッド・マグパイズとシドニー・スワンズとの対戦が行われた。AFLのビジネス上でも重要なシリーズであったこの試合において「事件」は起こった。時間の経過にしたがってその概要をみてみると、以下のよ

うなものであった¹⁵⁾。

シドニー・スワンズが勝利をほぼ手中にしていた試合の終盤、シドニー・スワンズの名選手アダム・グズ(Adam Goodes)¹⁶⁾がタッチライン沿いにキックをした。彼の立っている位置は観客席の間近であったが、キックの後それほど間を置かずグズ選手が動きを止め、観客席に向かい、観客の誰かを指さした。非常に激高した面持ちであることが見て取れたが、そうした行動が何度か繰り返された。その後、彼はベンチに下がり、試合の残り時間、グラウンドに戻らなかった。勝利のセレモニーをチームメイトと共にすることもなく、彼が「優秀選手」に選ばれたとのアナウンスがあっても、当の本人は姿を現すことはなかった。

グズほどの選手をして、そこまでのショックを与えたものは相手チームのサポーターからの野次であり、そこで投げかけられた言葉は「ape(類人猿)」。そして、暴言の主は13歳(当時)の少女であった¹⁷⁾。

試合後のロッカールームは異様な雰囲気にも包まれていた。自チームのメンバーだけではなく、対戦チーム、コリスッドのオーナーであるエディ・マグワイア(Eddie McGuire)が直接謝罪に訪れるという異例の事態をテレビカメラは映し出していた。マグワイアは、今回の出来事がAFLの規定に違反していることを認めるとともに、これまでもこれからもこうした差別を許さないことを公式に繰り返し明言した。そして、少女もグズ選手に直接会って謝罪をした。

この時点までのことであれば、その後にかけてまで大きく話題となることはなかったかもしれない。しかし、この問題は「当事者」たちの謝罪をもって終わりを迎えることなく、「第2幕」が控えていた。その幕を開けたのは、ロッカールームでグズに謝罪をしたマグワイア本人であり、彼のラジオ番組での発言であった。

試合の5日後、5月29日にマグワイアがホストを務めるメルボルンのラジオ局Triple Mの“Hot Breakfast”のコーナーで、メルボルンで近々公

演が予定されていたミュージカル「キング・コング」に話題が及んだときの共演者ルーク・ダーシー(Luke Darcy)とのやりとりは次のようなものだった¹⁸⁾。

ダーシー：「キング・コング」のプロモーションとして何がいいのかって。

マグワイア：アダム・グズにしたらいいいんじゃないか、そう思わないか。

ダーシー：いや、僕はそう思わないね……まったく考えられないね。

マグワイア：君だって、それが良いと思っっているんだろう。

ダーシー：誰をだって？

マグワイア：グズさ。

ダーシー：何だって？……何のことだ？

マグワイア：「類人猿」騒ぎのことだよ。

軽口のマグワイアと困惑気味のダーシーという対照的な二人のやり取りの後CMが挟まれた。そして、CM明け、マグワイアが先ほどの発言が誤解を生む不適切なものであったと謝罪した。その後も彼はラジオでの発言について釈明と謝罪を繰り返したが、彼の発言に対する賛否双方の意見がさまざまな方面から巻き起こり社会的な騒動となった¹⁹⁾。結局、彼はRule35に基づく罰金を支払ったAFL史上最初のクラブ・オーナーとなった。

「事件」の意味するもの

グズが人種差別の暴言を受けた試合は、皮肉にも、ウィンマーが人種差別の野次への抗議を契機として制定されたRule35(30)の制定20周年記念の試合であった。こうした(単なる)巡り合わせを超えて、マグワイアの軽率ともいえる発言をきっかけに騒動が拡大していったが、彼はそれまで差別的な発言や行動を取ってきた人物ではなかった。そればかりか、自らオーナーを務めるクラブチームにアボリジナルのプレイヤーを採用したり、クラブによるアボリジナルの人々のためのプログラムを実施するなどの取り組みを重ねて

きていた。こうした点をふまえてみたとき、この「事件」は、1970年代以降、アボリジナルの人々に対する施策を含め（さまざまな評価があるにせよ）多文化主義のスタンスによる政策を進めてきたオーストラリアの社会における差別意識がなお根深く、複雑である状況²⁰⁾を背景として起こったものととらえることができる。

前述のように、Rule35(30)の制定以後、AFLは差別をなくすためのさまざまな取り組みを継続的に行ってきたおり、AFL全体としては、差別は許されないことであるとの理解は一定程度進んでいることが調査からもうかがうことができる²¹⁾。同時に、スポーツは人々の情動がストレートに出される場であり、差別的な暴言が飛び交うことが、ある意味「日常化」しているとする意見を否定しきれない現実がある²²⁾。また、クラブの中での位置づけがアボリジナルでない選手と比較すると十分ではないと感じているアボリジナルの選手たちも少なくない²³⁾。日常生活の場面に目を向ければ、AFLの有名選手ですら、ショッピングセンターで他の買い物客が自分をまるで物取りを見るような目をしながら手元のバッグを抱え込むという場面に出くわすとの証言もある²⁴⁾。

以前のようなあからさまな差別は顕在化しないものの、日常の中の何気ない場面に頻出するこうした差別の現実に関して“casual racism”と表現されているが²⁵⁾、藤川が現代社会を「人種主義者なき人種主義」社会と特徴付けていること²⁶⁾と共通しているであろう—筆者は（概念規定は明確には定まっていないが）“hidden racism”との表現もありうるのではないかと考えている—。

しかし（行きつ戻りつの議論となるが）、オーストラリアの社会においてオーストラリア・フットボールの占める位置の大きさゆえに、差別の問題に対する社会的影響力があることの自覚の上で立ったこれまでの取り組み（の効果）について「トリックル・ダウン効果」の用語を使って表現されている²⁷⁾。未だ差別が根強く残っていること²⁸⁾を認めつつも、スポーツの世界において先陣を切

る形でのRule35(30)の制定によってもたらされた成果をまで否定してしまう（あるいは、成果がないかのようにとらえる）ことは、スポーツにおける差別（目標としての平等）をめぐる議論を後戻りさせるだけのことに終わってしまう。

以上の検討の中で、AFL、ひいてはオーストラリアのスポーツにおける差別の問題は構造的な複雑さの中にあることが明らかとなった。2013年の「事件」を対象としてさまざまなアプローチを用いながら検討した研究成果も出されてきており、より詳細な検討は他日を期したい。

【注】

1)訳文は、「日本学術会議健康・生活科学委員会健康・スポーツ分科会監訳」版より。

2)<http://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2014.pdf>（オリンピック憲章〔2014年12月8日から有効〕）

3)文化的な多様性(diversity)の相互の理解を促進する上でのスポーツの活用に関するヨーロッパでの実践を取り上げたものとして、Gasparini, G. & A. Cometti, eds. 2010, *Sport facing the test of cultural diversity: Integration and intercultural dialogue in Europe: analysis and practical examples*, Council of Europe Publishing. また、Spaaij, R., J. Magee, and R. Jeanes, 2014, *Sport and Social Exclusion in Global Society*, Routledge、なども参照。

4)この点に関してはさまざまに論じられているが、最近のものとして以下の文献を参照。宮島喬(2014)『多文化であることとは』岩波書店。森千香子(2016)「承認がうみだす新たな排除とは何か」田中拓道編『承認—社会哲学と社会政策の対話』法政大学出版局。森千香子(2016)『排除と抵抗の郊外：フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会。

5)オーストラリアにおける多文化主義をめぐる政策的推移やその社会的、政治的背景、および課題等については、以下の文献を参照。塩原良和(2005)

『ネオ・リベラリズム時代の多文化—オーストラリアン・マルチカルチャリズムの変容』三元社。塩原良和(2010)『変革する多文化主義—オーストラリアからの展望』法政大学出版局。また、多文化主義に関する研究動向をまとめたものとして、村上一基(2016)「多文化主義の研究動向—民族・人種マイノリティの承認」前掲田中編(2016)所収。6)オーストラリアン・フットボールの人々の間への浸透度、人気の高さ、そして、実際のゲームの場面での人々の熱狂ぶりは、日本では想像できないほどのものである。細かく見ていけば、メルボルンを州都とするヴィクトリア州では圧倒的な人気を誇っている一方、境を接するニューサウスウェールズ州(州都はシドニー)ではラグビー・リーグの人気の方が高いことに見られるように、州による種目の人気度の違いはオーストラリアのスポーツの特徴のひとつといえることができる。

同時に、メディアの介在によって、こうした傾向に変化が現れてきていることも指摘することができる。高津勝、尾崎正峰編著(2006)『越境するスポーツ』創文企画。尾崎正峰(2007)「ワールドカップ—グローバル化するスポーツ環境」渡辺雅男、渡辺治共編『「現代」という環境』旬報社。

7)尾崎正峰(2009)「アボリジナルとスポーツ」『一橋大学スポーツ研究 2009』No.28。他の日本語文献で、この件を取り上げているものとして、藤川隆男(2011)『人種差別の世界史—白人性とは何か?—』刀水書房。また、藤川隆男編(2005)『白人とは何か?』刀水書房、も参照。

8)AFL のルール上の定義によれば、「1unit」は「1,000(豪)ドル」とされている。

9)日付としては 4 月 25 日。第一次世界大戦中の 1915 年の同日、トルコのガリポリでの戦闘におけるオーストラリアとニュージーランドの連合軍(頭文字をとって ANZAC)の死傷者への追悼の日。なお、記念日となったのは 1969 年。

10) Klugman, M. and G. Osmond, 2013, *Black and Proud: The Story of an Iconic Photo*, NewSouth Publishing.

11)制定当初の条項の番号は「30」であった。その後の他の規定改定で現在の「35」となっている。

12) Gardiner, G. 1997, “Racial Abuse and Football: The Australian Football League's Racial Vilification Rule in Review”, *Sporting Traditions*, Vol.14, No.1 (Nov. 1997). Gardiner, G. 2003, “Black` Bodies — `White` Codes: Indigenous Footballers, Racism and the Australian Football League's Racial and Religious Vilification Code”, Bale, J. and M. Cronin, eds. *Sport and Postcolonialism*, Berg.

13) Gorman, S., D. Lusher and K. Reeves, 2016, “Introduction: the AFL's Rule 35”, *Sport in Society Cultures, Commerce, Media, Politics*, Vol.19 No.4, 2016, Routledge, 477. なお、この研究成果については、研究室の同僚である鈴木直文氏から情報提供を受けた。記して謝意を表したい。

14) Ibid. 478.

15) Ibid. 473.

16)グズ選手は、現役時代、選手としてさまざまな賞の榮譽に輝き、今世紀における優れた先住民のフットボールプレイヤー「Indigenous Team of Century」の一人に選ばれるほどであった。また、彼に対する社会的評価は、スポーツという領域を超えて非常に高かった。その象徴的な事柄の一つとして、AFL 時代の選手としてのめざましい活躍とともに、先住民のためのさまざまな社会的活動への尽力が評価され、2014 年の Australia of the Year を受賞したことをあげることができる。

同賞に関して、アボリジナルのアスリートということで歴史をたぐれば、シドニー・オリンピック大会の女子 400m 走で金メダルを獲得し、オーストラリアの国旗とアボリジナルの旗を結び合わせてウィニング・ランを行ったことで歴史に名を残すこととなったキャシー・フリーマン(Cathy Freeman)。オーストラリア国内における彼女への評価はシドニー大会よりもだいぶ前から高いものであり、青年層に対して与えられる Young Australian of the Year を 1990 年に、そして、

Australian of the Year を 1998 年に受賞している。

また、フリーマンの陰に隠れてしまった感があるが、1996 年のアトランタ・オリンピック大会で女子ホッケーチームのメンバーとしてアボリジナルの女子アスリート初の金メダリストとなった、ダーウィン生まれのノヴァ・ペリス(Nova Peris) も 1997 年の Young Australian of the Year を受賞している。彼女は、2013 年の選挙でギラード首相からの指名で立候補し上院議員となった。

17) グッズ選手は尊厳を侵害されたとして野次の主の競技場の退場を求め、少女は競技場の警備員によって会場から連れ出され、警察官から何時間かの尋問を受けた。Gorman *et al.* op.cit. 473.

18) Ibid. 474. なお、上記文献の注記によればこの部分は、Wilson, C. 2013, “Swans ‘Bewildered’ by McGuire’s Gaffe,” *The Age* からの引用。

19) 前川真裕子(2015)「冗談として消費されるレイシズムーオーストラリアン・フットボール・リーグを騒然とさせた「類人猿」発言をめぐってー」『オーストラリア研究』28号。

20) たとえば、ガッサン・ハージ (保莉実・塩原良和訳)(2003)『ホワイト・ネイション』平凡社(Hage, G. 1998, *White Nation Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*, Pluto Press Australia) 参照。ハージの議論に関する藤川の指摘も参照、前掲、藤川(2011)251~252 頁。

21) Gorman *et al.* op.cit. 607-608.

22) 試合中のファン、サポーターの野次のみならず、Rule35 の制定後、差別発言、行動のために違反金を課せられる選手がいることも事実である。

23) Gorman *et al.* op.cit. 609-610.

24) Ibid. 478.

25) Ibid. 484.

26) 前掲、藤川(2011)、185 頁。

27) Gorman *et al.* op.cit. 477.

28) Pieric, J. Racism in the AFL: improvements, but work still to be done, *The Age*, MAY 26 2015.

<参考文献>

* Adair, D. and R. Vamplew, eds. 1997, *Sport in Australian History*, Oxford University Press.

* Adair, D. 1998, “Conformity, Diversity, and Difference in Antipodean Physical Culture: The Indelible Influence of Immigration, Ethnicity, and Race during the Formative Years of Organized Sport in Australia, c.1788-1918”, Cronin, M. and D. Mayall, eds. *Sporting Nationalisms: Identity, Ethnicity, Immigration and Assimilation*, Frank Cass.

* Cashman, R. 2001, *Sport in the National Imagination: Australian Sport in the Federation Decades*, Walla Walla Press, in conjunction with the Centre for Olympic Studies, University of New South Wales.

* Godwel, D. 2000, “The Olympic Branding of Aborigines: The 2000 Olympic Games and Australia’s Indigenous Peoples”, Schaffer, K. and S. Smith, eds. *The Olympics at the Millennium*, Rutgers University Press.

* de Moore, G. and T. Willis, 2005, “Marngrook and the Evolution of Australian Football”, Hess, R., M. Nicholson and B. Stewart, eds. *Football Fever: Crossing Boundaries*, Maribyrnong Press.

* Rigney, D. 2003, “Sport, Indigenous Australians and Invader Dreaming: A Critique”, Bale, J and M. Cronin, eds. *Sport and Postcolonialism*, Berg.

* Tatz, T. 1984, “Race, Sport and Politics”, *Sporting Traditions*, Vol.1, No.1 (Nov. 1984).

* Tatz, T. 1987, *Aborigines in Sport*, Australian Society for Sports History.

* Tatz, T. 1995, *Obstacle Race: Aborigines in Sport*, UNSW Press.

* Tatz, T. and Tatz, P. 2000, *Black Gold: the Aboriginal and Islander Sports Hall of Fame*, Aboriginal Studies Press.